

令和4年度 事業報告書

学校法人 新渡戸文化学園

1. 法人の概要

・設置する学校 (令和4年5月1日現在)

(単位：人)

学 校	学科・専攻等	収容定員	在学者数	専任教職員数		
				教員	職員	計
新渡戸文化子ども園 (共学)		110	157	17	1	18
新渡戸文化小学校 (共学)		360	357	25	9	34
新渡戸文化中学校 (共学)		180	115	9	1	10
新渡戸文化高等学校 (共学)	全日制 普通科	300	226	19	2	21
新渡戸文化短期大学 (共学)	食物栄養学科	160	133	12	9	21
	専攻科	20	0			
	臨床検査学科	240	240	14	3	17
事務局 (給食を含む)					18	18
合 計		1,370	1,228	96	43	139

・役員および評議員 (令和4年5月1日現在)

役職名	氏 名	説 明
理 事 長	平岩 国泰	就任日令和元年6月1日
常務理事	林 徹	就任日平成23年4月1日
理 事	9 名	理事会による選任5名、評議員の互選3名、短大学長1名 (理事長、常務理事を含む)
監 事	2 名	学外者2名
評 議 員	21名	教職員から4名、卒業生から2名、法人に関係ある学識経験者9名、理事の職にある者 (評議員の互選3名を除く) 6名

2. 事業の概要

当該年度の事業項目	事業の目的、概要
子ども園	<p>教職員の個性を尊重し、子どもを主語にした保育を実践し、一歳児保育の安全な運営を図る。</p> <p>1. 園児が自分で見つけ、選び、作り上げる教育デザイン</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学校との接続カリキュラムに関する協議を開始した。 ・毎年実施している園庭の充実を実施した。 ・Book Street/ Art Streetの環境整備を継続している。 ・こどもが一人になれる場所 (余白) の設定等、風越学園での学びを実践した。 ・園児の意見や志向を環境に反映させる工夫をした。 ・レジョ・エミリア教育研修を実施した。 <p>2. 教職員の自律とスキル向上による個性尊重の追求</p> <ul style="list-style-type: none"> ・採用募集のためのオンライン説明会を年1回実施した。 ・“こどもを主語に”を主題としたカンファレンスの年2回開催による保育実践に関するアウトプット研修とインプット研修の充実を図った。 ・園内労働環境及びシフトの見直し、教職員の負担軽減と環境整備を実施した。 ・残業時間数目標月平均5時間以内 (休憩時間の確保) は17.5時間と未達であった。 ・採用募集広告に注力した。(大学の先生への求人広報等) ・非常勤職員への子育て支援員・保育士資格取得の推奨に取り組んだ。 <p>3. 安心安全な園で、常に誠実な社会的責任を遂行</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1歳児保育の開始も鑑み、あらゆる状況下における子どもの命最優先の徹底を図った。 <p>4. 未来へ挑戦する強みを持った人気園への進化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1歳児保育の安定運営を実践した。 ・ママパパカレッジを年3回開催した。 ・教育コンテンツの打ち出しを実行した。 <p>5. 幸せを感じるペアレンツサポート徹底</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者の声に応じて、毎年継続した改善策の実施に取り組んだ。 ・保護者連携の研修会を年2回開催した。 ・在園保護者向け講座をママパパカレッジと同日開催した。
小学校	<p>「子どもが主語」の視点で小学校教育を見直し、新しい小学校のモデルとなる</p> <p>1. 子どもが主語となる学校生活や行事の実現</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校生活のルールについて現状の課題を把握し、スクールミーティングを通じた改善を図った。 ・スクールミーティングで決定したものは、その運営にも子どもが参画した。 ・各学年で、行事について子どもたちが企画に参画した。 ・新たな行事について、子どもたちが運営に参画した。

<p>小学校</p>	<p>2. 基礎基本を身につけた自律型学習者の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> 各学年、各教科で基礎基本とは何かを明確にし、年間指導計画のブラッシュアップを進めた。 各教科の基礎基本の定着を図るための手段、方法の施行に取り組んだ。 各学年で学習指導要領をベースにした新渡戸独自のカリキュラムの構築に取り組んだ。 <p>3. 教師の個性を生かした授業の創造</p> <ul style="list-style-type: none"> 各学年で実社会から学び、実社会を意識したプロジェクトの企画と実践を行った。 日々の授業で、子どもたちが意欲的に取り組むような仕組みづくりに取り組んだ。 一人一人の教師が個性を生かした授業の創造に取り組んだ。 各学年で1回以上の研究授業を行い授業後は協議会を実施した。 残業時間数目標 月平均20時間以内は21時間と未達であった。 <p>4. 安心安全な学習環境の整備・保持</p> <ul style="list-style-type: none"> 年間5回、子どもにいじめ調査を実施し、現状把握といじめの解決に取り組んだ。 毎学期末、保護者に対してのいじめ調査に基づく、現状把握を行った。 第二東京弁護士会からの講師によるいじめ予防教室を年間2回実施した。 ハイパーQUを実施し、子どもたちの学校生活の満足度やクラスの状態を調べ、教師の指導を見直し、よりよい学校経営を推進した。 子どもの目線に立って危険箇所の発見と速やかな修繕を行った。 <p>5. 第1志望で選ばれる小学校の実現</p> <ul style="list-style-type: none"> 保護者の期待、要望をしっかりと考慮した説明会の企画実施に取り組んだ。 「もっとやりたい」と言われるようなワクワク感のある体験授業を実施した。 過去のデータを分析し、実態や傾向を把握し、適切な募集活動を展開した。 子ども園との連携を深め、内部進学者15名以上を実現した。
<p>中学校</p>	<p>探求型学習に取り組むことにより主体性と創造性にあふれた学びを実現する</p> <p>1. 自走する生徒の育成 <社会性とメタ認知能力の育成></p> <ul style="list-style-type: none"> 「0時間目」シラバスの充実を図った。 生徒会活動の活性化（スクールライフ改訂等）を図った。 コアラニングにおける個別最適化を推進した。 スタフェス企画運営（PBL発表の場としての整備および外部公開の推進）を進めた。 <p>2. 中学3C教育コンセプトの完成 <非認知能力育成型教育等の企画・推進></p> <ul style="list-style-type: none"> 教科横断的・縦断的な学習活動及びICT教育と連動した双方向授業を展開した。 非認知能力獲得の見える化（外部連携による変容の数値化）を図った。 <p>3. メンターとしての自律型教員集団 <研修と実践による意識改革とスキル獲得></p> <ul style="list-style-type: none"> 新機軸教育理念の共通理解と当事者意識を醸成した。 教科指導の専門性強化（研修企画・推進）を図った。 校務組織（デザインチーム制・チュートリアル制等）の改善を進めた。 年間行事計画の見直しを図った。 残業時間数目標 月平均20時間以内は21.5時間と未達であった。 <p>4. Society5.0適合型カリキュラム <語学力とICT自在活用力の育成></p> <ul style="list-style-type: none"> 英語・英会話教育の充実（オーナーズクラス試行等）を図った。 学習アプリ、エンゲージメント教材等を効果的に活用した。 ポートフォリオの充実を図った。 <p>活動履歴の蓄積と振り返りによるメタ認知能力育成及び課題発見・課題解決学習としてのCCへの組み込み</p> <p>5. 教育CSVを牽引するNITOBEブランド募集強化 <第一志望校としてのブランド確立></p> <ul style="list-style-type: none"> 教育方針周知・理解と信頼の醸成を図った。 学校評価アンケートに基づく教育活動の検討・改善を進めた。 入試業務等での事務局との連携・改善を進めた。 HP及びSNS等メディア活用を推進した。 チーム担任制、スタディ・ツアー等を本格的に実施した。
<p>高校</p>	<p>社会課題に取り組むことにより独創性と共創性にあふれた学びを実現する高等学校になる</p> <p>1. 越境する生徒の育成 <生徒の自己表現支援></p> <ul style="list-style-type: none"> 各コースのカリキュラムにコンクール対策等を織り込むとともに、校外活動を奨励した。 デジタルデバイスを活用したプレゼン力・表現力を磨く活動を推進した。 体育祭、新渡戸祭・スタフェス等行事企画運営の生徒主体化を図った。 放課後活動（CBL）等への参画推進と持続可能な部活動のあり方を検討した。 生徒参加の校内規定（スクールライフ）を改正した。

<p>高校</p>	<p>2. 高校3C教育コンセプトの完成 <カリキュラム改善> ・課題解決力、論理的思考力・表現力を養う授業を研究・実践した。 ・多様な評価要素と適正な評価法に則った成績評価を検討した。 ・クロスカリキュラムの改善およびコース制再編を検討した。</p> <p>3. 多様かつ卓抜な進路実績 <生徒の自己実現支援> ・三年間を見通した進路指導全体計画に基づく組織的・計画的な進路指導を行った。 ・教育活動の外部発信による提携の推進及び高大連携の推進（進路先確保）に努めた。 ・コアラーニングの重点化・個別最適化の推進を図った。 ・成果実績のデジタルポートフォリオ化を促進した。</p> <p>4. ファシリテーターとしての自律型教員集団 <教育理念理解と当事者意識の醸成> ・デザインチームに基づく校務運営の効率化・公平化の促進と意思決定の明確化・簡素化を図った。 ・Webex Teamsによる情報共有と進捗管理の効率化を図った。 ・自主研修による教科指導の専門性を強化した。 ・チュートリアル制の導入による「寄り添うキャリア教育」を推進した。 ・教育活動での学園各校種及び事務局との連携強化（円滑にして臨機応変な施設使用等）を図った。 ・残業時間数目標 月平均20時間以内は19.2時間と目標を達成した。</p> <p>5. 教育CSVを牽引するNITOBEブランド <第一志望校としてのブランド確立> ・学校案内パンフレット・HP活用とSNS発信戦略等を展開した。 ・入試業務での学園事務局との連携・改善を推進した。 ・「旅する学校」モデル（スタディツアー含む）の推進と成果発信を行った。 ・アドミッションポリシーの検証とそれに基づく入試改革（外部機関連携）を進めた。</p>
<p>アフタースクール</p>	<p>常に子どもを主語におきながら子どもたちの自律に挑戦し、「全国モデル」となるアフタースクールに進化する</p> <p>1. 子どもが常に主語である運営 ・遊び・学習・プログラムなどのアフタースクールの活動が、すべて「子ども主語」になっている運営を実施した。 ・子どもの「やりたい！」がいつでも実現でき、過ごし方に多くの選択肢があるアフタースクールの運営を実施した。</p> <p>2. 大人に依存しない自律した子どもを育てる環境 ・大人に依存せず、子ども自身で時間管理を行えるための環境づくりを実施した。 ・遊び・学習・プログラムなど放課後の過ごし方を自ら決め、子ども自身がアフタースクールをつくっていく仕組みづくりを図った。</p> <p>3. アフタースクールを支える「日本一」のスタッフ ・常勤・非常勤スタッフも含めたすべてのスタッフが「子どもを主語」に考えるチームづくりを一部実現した。 ・子どもの「やりたい！」に寄り添い、それを実現するスタッフの育成に努めた。 ・残業時間数目標 月平均10時間以内は14.4時間と未達であった。</p> <p>4. 高学年が来なくなるアフタースクール ・高学年が友だち同士で気軽に利用でき、学校でも家庭でもなくゆっくり過ごせる居場所づくりを目指すも、下期で一部高学年に提供したままにとどまった。 ・多様なプログラムや社会とつながるプロジェクトを展開することで、さまざまなことにチャレンジし学べる環境づくりを実施した。</p> <p>5. 子どもにとって安心安全な居場所 ・常に子どもに寄り添い、家庭・学校とは異なる安心な居場所となる放課後づくりを小学校と協力しながら実現した。 ・大きなケガや事故を未然に防ぎ、安全性を保つ人員体制と仕組みづくりにチャレンジするも、上期に大きなケガが発生した。下期は安定的に運営出来た。</p> <p>6. 第1志望実現のための各校への教育活動・募集活動貢献 ・小学校との密な連携による、教育的付加価値を高めることに貢献した。 ・プログラムや部活動、クラブ活動における幼小中高との連携を推進した。 ・学校説明会、VIVISTOPの活用など地域貢献などを通じた募集活動に貢献した。</p>
<p>短大 (共通)</p>	<p>自ら人生を切り拓き、生きがいのある未来と社会を創造する人を育てる短期大学となる</p> <p>1. 建学の精神、教育理念の下、社会的に自立し、社会に貢献する高い専門性と教養を備えた職業人を育成する短期大学 ・新カリキュラムを軌道に乗せると同時に課題を抽出し23年度以降の変更内容を検討した。 ・新渡戸フォリオ等を活用したオンデマンド型学習システムを開発した。 ・授業の理解度の確認と学修進捗度に応じた補習指導を行った。</p>

<p>短大 (共通)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・短大共通基礎教養科目による本学独自の体系的カリキュラムを構築した。 ・新カリキュラムに対応した資格支援・新就職先開拓を推進した。 <p>2. 人々の健康と医療を支える人材を育成する地域に根ざした短期大学</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中野区を核に近隣区も含め「食」「医療」を中心とした連携事業を推進した。 ・FD・SDの活性化による組織的な教職員の質的向上に努めた。 ・総合学園としての強味を活かし、学園各校との連携講座等・プロジェクト等をさらに強化した。 ・自己点検・評価を踏まえたPDCAサイクルの確立に努めた。 <p>3. 中期的視点に立ち、高等教育機関としての存在感を高める基盤を整備</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ハード面での環境整備（食品加工室新設、DX対応PCルーム、他設備環境）を進めた。 ・2023年度からの東高円寺・中野キャンパスの時程統一に向け、インフラを整備した。 ・働き方改革と教・職員満足度改善に向けた諸施策を推進した。 ・短大事務局の残業時間数目標 月平均15時間以内は19時間と未達であった。
<p>短大 (食物栄養)</p>	<p>自由な発想をもち「食」に関わる多様な人材を輩出する学科となる</p> <p>1. 健康を維持するための食生活・食育と食品衛生に関する正しい知識を人々に提供できる栄養士を養成する学科</p> <ul style="list-style-type: none"> ・栄養士実力認定試験結果の向上（GPAとの相関分析による授業へのフィードバック）を図った。 ・授業評価の検証とGPAの向上を実現した。 ・栄養素と体の働きの関連を理解し、それを食品開発に生かすことができる人材の養成に努めた。 ・食品衛生の知識習得と実践を進めた。 ・SDGsの取組みを授業展開に折り込んだ。 ・残業時間数目標 月平均10時間以内は14.4時間と未達であった。 <p>2. 高齢者や子供の体のしくみを理解し、適切に対応できる栄養士、美味しい料理やお菓子も創造できる栄養士を育てる学科</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プロに学ぶ専門料理、製菓・製パン、フードプロデュース、フルーツカッティング実習など特色ある実習教育を推進した。 ・食品ロス削減に向けた地域連携を拡大した。 ・地元の企業とスイーツのインクルーシブフードを開発し、産官学連携を推進した。 ・食の新領域の授業を充実し、本学出身栄養士の活躍フィールドの拡大に努めた。 ・キャリアデザインを通し自己発見を促し、適性な職業へ誘導した。
<p>短大 (臨床検査)</p>	<p>「臨床検査技師は新渡戸文化短期大学から」と憧れの学科となる</p> <p>1. 短期大学臨床検査学科として、3年間で高い技術力のある優れた臨床検査技師を養成する学科</p> <ul style="list-style-type: none"> ・令和4年度より始まる新カリキュラムの効果的な実施とスムーズな移行を行った。 ・国家試験合格率を改善した。（81.7% ⇒ 90.4%） ・GPA等を活用したチューター制度を強化（学内外模試・国家試験成績・GPAの相関分析）した。 ・臨床検査技師養成学校「指定校」の条件を具備した専任教員を確保した。 ・国家試験過去問題のシステム運用と学習機会の拡大を図った。 ・3年制の優位性を発揮した効果的カリキュラムを展開した。 ・残業時間数目標 月平均10時間以内は8.5時間と目標を達成した。 <p>2. 充実した臨地実習を通して、首都圏の就職に強い、即戦力となる臨床検査技師を養成する学科</p> <ul style="list-style-type: none"> ・伝統校としての実習病院の確保と新規開拓を実施した。 ・令和4年度 新カリキュラムに対応した臨地実習の改変を図った。 ・求人票データの学生閲覧を推進した。 <p>3. 臨床検査学研究所の活性化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年間1回の研究員の研究成果報告会を開催した。 ・卒業生と在学生の学術交流と研究・研修支援を進めた。
<p>事務局</p>	<p>「未来の学校」の実現を支えるため、教学と協調・協働する戦略推進事務局となる</p> <p>1. 強靱な財務体質の保持</p> <ul style="list-style-type: none"> ・徹底した予算管理に基づく安定したキャッシュフローを確保した。 ・5か年事業計画に基づく事業活動収支及び資金収支計画の必達の確保に努めた。 <p>2. 人事制度の進化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現行人事制度の見直し準備を行った。 <p>3. 働き方改革の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「在宅勤務」の状況把握と効率的運用に努めた。 ・有給休暇の効率的利用を推進した。 ・育児・介護休業に係る対象者の拡大（非常勤、父親）に向け学内周知に努めた。 ・「複業」の前向き展開を実施した。

事務局

- ・新渡戸フューチャーアドバイザー（NFA）、新渡戸フューチャーパートナー（NFP）及び新渡戸フューチャーインターン（NFI）の効率的活用を行った。
- ・残業時間数目標 月平均8時間以内は9.1時間と未達であった。
- 4. 整然としたガバナンス及びコンプライアンスの保持**
 - ・監事による業務監査の強化を目指した。
 - ・顧問弁護士、社労士との連携強化によるコンプライアンスの徹底を目指した。
- 5. 危機管理体制の充実**
 - ・新型コロナウイルス感染症防止におけるルールの徹底を図った。
 - ・個人情報保護及び情報セキュリティに係るインシデント発生時の対応マニュアル化を図った。
- 6. 経営管理・組織力の強化**
 - ・理事長室の廃止及び経営企画室の新設を実施した。
 - ・広報室の機能強化を図った。
 - ・入学者募集力の向上に繋がるHPなど情報発信ツールの恒常的刷新を決定した。
- 7. 合理的な事務処理体制への改変**
 - ・人材の効果的配置による事務生産性の向上に努めた。
- 8. 100周年募金計画の達成**
 - ・100周年に向けた継続的な寄付依頼を継続した。
 - ・取引のある外部法人への一層の働きかけを行った。
- 9. 100周年に向けた施設・設備投資計画の達成**
 - ・未来の学校実現に資する、優先順位をつけた効果的設備投資を進めた。
 - ・学内ICT教育環境の充実、緑化の推進、施設貸の積極展開を図った。

3. 令和四年度理事会等の開催状況

日時	会議
令和4年5月25日	理事会・評議員会
令和4年7月27日	理事会
令和4年10月19日	理事会・評議員会
令和4年12月7日	理事会
令和5年3月15日	理事会・評議員会

4. 財務の概要

・収支の推移

(単位 百万円)

	29年度	30年度	元年度	2年度	3年度	4年度
A. 事業活動収入	1,833	1,865	1,826	1,766	1,898	2,109
B. 基本金組入額	0	42	△25	△69	△234	△57
C. 事業活動収入(A+B)	1,833	1,907	1,801	1,697	1,664	2,052
D. 事業活動支出	1,722	1,849	1,807	1,894	1,966	1,987
(基本金組入前当年度収支差額A-D)	111	16	19	△128	△68	122